

<小学校 教育相談>

いじめに関する基礎的研究と指導の一視点

— 個をとりまく学級集団の指導を通して —

南風原町立北丘小学校教諭 小波津 久美子

目 次

| | |
|---------------------------|----|
| I テーマ設定の理由 | 51 |
| II 研究仮説 | 51 |
| III 研究内容 | |
| 1 いじめとは | |
| (1) いじめの定義 | 52 |
| (2) いじめの問題点 | 52 |
| (3) いじめの態様 | 52 |
| 2 いじめの原因と背景 | |
| (1) いじめの発生原因 | 52 |
| (2) いじめの構造 | 53 |
| 3 いじめの発見の方法と対応 | |
| (1) いじめられている子への対応 | 54 |
| (2) いじめる子への対応 | 54 |
| (3) 学級集団への対応 | 54 |
| 4 いじめの問題解決へ関わった例 | |
| (1) いじめを起こす学級集団への対応 | 55 |
| (2) いじめられ孤立するA子 | 56 |
| (3) いじめに走るB子 | 58 |
| IV まとめと今後の課題 | 60 |
| <主な参考文献> | 60 |

<小学校 教育相談>

いじめに関する基礎的研究と指導の一視点

— 個をとりまく学級集団の指導を通して —

南風原町立北丘小学校教諭 小波津 久美子

I テーマ設定の理由

「最高学年の6年生、楽しいクラスにしたいな。」「友達できるといいな。」等、新学期がスタートすると聞こえてくる児童の希望に満ちた声。みんな仲良く、笑いの絶えない学級にしたいという思いや願い。学級は、児童の期待に応えうる楽しい場になっているだろうか。学びがいのある魅力的な場になっているだろうか。

学習指導要領には、「自ら学ぶ意欲」と「個性を生かす教育」を重視するという新しい学力観に立つ教育の基本理念が示されている。これからの中では、児童一人一人を尊重する教育を推進する必要があり、そのためには児童一人一人のよさや可能性を伸ばす教育の実践が求められている。

このような、新しい学力観に立つ教育を開拓する教育活動の基盤となるのが学級である。学校教育法では小学校教育の目標のひとつに「人間相互の関係について、正しい理解と協同、自主及び自律の精神を養うこと」(18条1)をあげている。この能力は、集団の中でお互いに働きかけ合うという体験なしには獲得されない。学級集団とは、そういう好ましい人間関係を結ぶ体験をする基本的な場であるといえる。学級集団が、児童にとって精神的に安定できる場となれば、一人一人のよさや可能性を生かし、児童自ら意欲的・主体的に自己実現が図られ、新学力観に立った教育も積極的に展開することができる。

ところが近年、学級の人間関係の歪みが原因の一つとなっていじめの問題が起こり、大きな社会問題となっている。

これまで私が担任した学級にも、いじめは起こった。いじめ問題の解決のため、「叱責」「説教」等の指導を行ったが、いじめはなかなか解消されなかった。その原因として、

- 「いじめられている子は、○○だから」といったいじめを消極的に認めているところがあった。
- 「いじめる子」と「いじめられている子」の当事者だけの問題としてとらえているところがあった。
- 児童の心の裏側を見落としてしまった。

等が考えられる。

いじめは、子供達の人格形成や行動傾向に大きな影響を与える問題である。いじめの発端は当事者だけの葛藤であっても、それが深刻化・拡散化するのは、双方を取り巻く集団の人間関係が大きく影響してくれる。したがって、いじめの取り組みに当たっては、集団全体を見据えた対応が重要になってくる。これまで私が行った当事者だけの個人指導でなく、一人一人の個性を尊重し、共感し合える人間関係を育成する事が大切になってくる。担任の洞察する力と児童の視点に立つ粘り強い指導の継続が必要であるといわれる。いずれにせよ学級経営の基礎として、人間的触れ合いを深め、いじめのない共感的な人間関係づくりに努める事は学級担任として大切なことである。

そこで集団の力がプラスの方向に流れ、一人一人を大切にした人間関係がつくり出せるように、カウンセリング・マインドを生かした理論や援助の在り方について研修を深める事が大切であると考え、本テーマを設定した。学年当初の「楽しい学校生活を送りたい」という児童の声に応えうるよう、もう一度教育の原点に戻り、教師のとるべき姿勢について見直したい。

II 研究仮説

- 1 児童一人一人がお互いに理解し合い、信頼し合う心のつながりが深まれば、いじめ問題も解消され、学級の雰囲気や人間関係が自主的で、協力的な好ましいものになるであろう。(相互受容・相互信頼)
- 2 好ましい人間関係が育てば、集団の中で自己の存在を自覚し、自分のよさや可能性を發揮し、自信をもって主体的に活動する児童が育つであろう。(存在感)

III 研究内容

1 いじめとは

(1) いじめの定義

いじめは、一般に「①自分より弱いものに対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が、深刻な苦痛を感じているもの」（文部省）とされる。いじめは、いじめる側の論理で判断すべき問題でも、客観的にいじめと言えるかどうかの問題でもない。いじめられる側の児童の立場から判断すべき問題である。

(2) いじめの問題点

① 児童の心の荒廃

今のいじめは、遊びの感覚で行われ、冷酷・陰湿な行為が継続的に繰り返される。いじめられる側は追いつめられ、いじめに耐えきれず死を選ぶという事件が多発している。

② 児童の心に潜む差別意識

児童の心の中に、自分より強い・弱いといった一種の差別意識が潜在している。強弱は力関係だけでなく、身体的特徴・生育地・特定の持ち物の所持・不所持等の要因を含む。そして、不特定多数の児童が、特定の個人を、あるいは特定少數の児童を対象にしていじめは起こる。

③ 予知しにくい発生

いじめ行為は恒常化しており、傍観的立場をとる子も多く、いじめに関わる児童は特別な児童ではない。いじめる側は集団化し、いじめもより巧妙に偽装され、責任が問われにくくなつた。また、仕返しを恐れ、いじめの事実について語ろうとしない場合が多く、いじめの実態を見えにくくしている。

(3) いじめの態様

いじめには様々な態様がある。一般的に以下のように区分されている。

表1. いじめの態様区分

| | |
|-------------|---------------|
| ① 言葉での脅し | ⑥ 暴力をふるう |
| ② ひやかし・からかい | ⑦ たかり |
| ③ 持ち物を隠す | ⑧ お節介・親切の押し付け |
| ④ 仲間はずれによる | ⑨ その他 |
| ⑤ 集団による無視 | |

いじめの態様は、複合して用いられることも多く、年齢が高くなるにつれて、精神的な苦痛のみを与える陰湿ないじめより、より直接的ないじめが多い。最近では多額の金品を巻き上げるといったことによって追いつめられてしまう例が増えている。

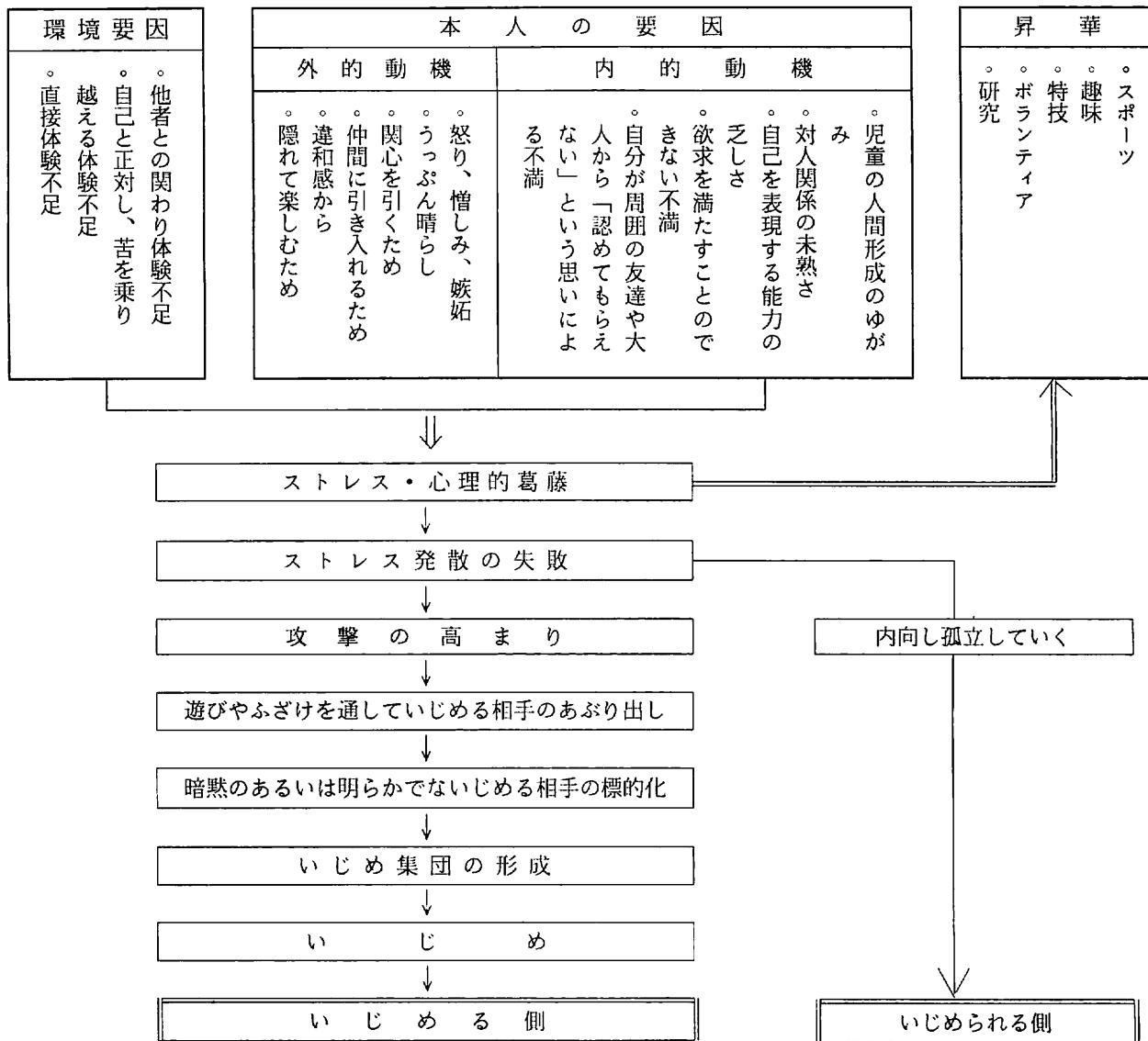
2 いじめの原因と背景

(1) いじめの発生原因

いじめの多くは、本人、学校、家庭、地域社会の様々な要因が複合的に絡み合って起こっている。したがつて、いじめの原因を特定することは難しい。児童のストレスという観点からいじめ問題について考えてみた。

図1は、いじめがいかに発生するかを示したものである。いじめの原因の一つは対人関係の未熟さがストレスを生み、いじめは「遊び」「面白い」という脆弱な規範意識につながり、罪悪感の欠如になっていくものだと考えられる。つまり、いじめは歪んだ形でのストレスの発散と考えることもできる。

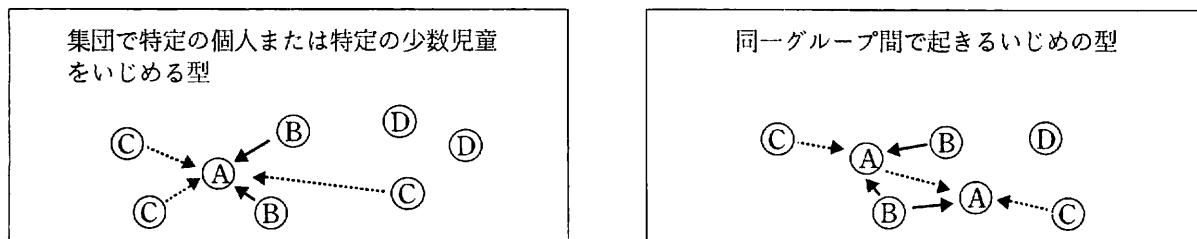
図1. いじめの発生過程



(2) いじめの構造

いじめのある学級の集団構造は、下の図のような2つの構造が見られる。基本的には、いじめられている子A、直接いじめている子B、面白がって見ている同調者C、見て見ぬふりをする傍観者Dの四層が見られる。

図2. いじめの集団構造図



この図でわかるように、いじめは当事者だけでなく、同調者や傍観者がいる事が問題である。同調者は、ひきがねさえあれば、いじめる側に変わり得る。また、学級集団の大部分を占めるDの層の態度がいじめを増長し、いじめられている児童の孤立感・疎外感を深めることになる。

3 いじめの発見の方法と対応

(1) いじめられている子への対応

① いじめられている子の共通性

- ・行動が緩慢。服装がだらしない。気が弱い。
- ・容姿に優れる。学力が高い。家庭が裕福。
- ・まわりと異なる考え方や行動をする。

② いじめられやすい子の心理

- ・仲間に入れない孤立感。
- ・自分の考えを言葉や行動で表現できない無力感。
- ・相手の言動に対して敏感な感受性。
- ・いじめをはねかえせない無気力。

③ 教師の対応

- ・児童との信頼関係をつくり、身の安全を守ってやるという態度で臨む。
- ・自分自身のよさに気付かせ、自信を持たせ、訴える力を付けさせる。
- ・自分自身の力で人間関係が克服できるように見守り必要に応じ援助する。

(2) いじめる子への対応

① いじめる子の共通性

- ・自分の感情のまま行動する。
- ・不平や不満が多い。
- ・自己顕示欲が強い。

② いじめる子の心理

- ・いじめの正当化
- ・「いじめるとおもしろい」、という不満のはけ口
- ・自分自身に自信が持てない劣等感の裏返しの行為
- ・自分より惨めな子をつくり、自分優位の誇示

③ 教師の対応

- ・児童理解に努め、いじめをする行為の背景をつかみ、その原因を解消してやる。
- ・悪者扱いせずによさを認め、自己の存在に価値を見い出させる。
- ・いじめは絶対許されない行為であるという自覚を促す。

(3) 学級集団への対応

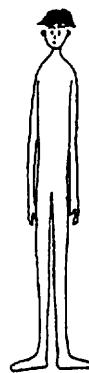
① いじめが起きた学級集団の雰囲気

- ・よそよそしい。
- ・まじめに行動するが、積極的に意見を述べたり、行動したりできない。
- ・何か面白いことはないかと考えて生活している。

② 学級成員の心理

- ・いじめのある事に気付かない無関心。
- ・余計な関わりを持って、いじめの標的になりたくない無責任。
- ・いじめ行為に直接関わらなければ、いじめに関係していないという罪悪感の欠如。
- ・人を見下す優越感。

いじめられている子からのサイン



命令口調

- 学用品へ落書きされる
- 持ち物を隠される
- 日記に気になる記述
- 沈んだ表情や何かを恐れる態度
- 遅刻・早退・欠席の増加
- ひどいあだ名で呼ばれる
- 持ち物がなくなる
- 体にあざ、すり傷ができる
- 登校を渋る
- 命令される
- お金の持ち出しが多い

いじめている子からのサイン



他人の失敗等に反応

- 当番活動をやらない
- 他をグループから排除する
- 攻撃的態度
- 教師の目を避ける
- ふてくされる

学級集団からのいじめのサイン



悪口や陰口を言われる

- あきらめムードや無気力感が感じられる
- 一人の活動が目立つ
- いくつかの閉鎖的なグループができる

③ 教師の対応

- ・傍観することは、いじめに加担する事であるということを認識させる。
- ・人権尊重の指導を徹底し、思いやりの心や正義感・自主性・主体性を育てる。
- ・お互いの個性を認め合う雰囲気をつくり、存在感・充実感を持たせる。
- ・助け合い、支え合う場を設定し、協力して活動する喜びや、人との関わり方を習得させる。
- ・問題に対する批判の目を育て、集団の浄化作用を高める。
- ・人間関係の実態把握を基に、グループの編成替えを行い人間関係の幅を広げる。

4 いじめ問題解決へ関わった例（小学校6年生）

(1) いじめを起こす学級集団への対応

① 学級の実態

明るく活気に満ちた集団であるが、集団としての教育力や相互作用が弱いように思える。それは、学級の中に力関係が生じ、一人一人の考え方方が抑えられている為と思われる。

学級の集団構造によると、男子6名からなるグループが力を握り、そのグループを中心に、学級全員を巻き込んだA子に対する仲間外れ、無視のいじめが発生していた。

次々いじめを起こすB子の存在や、いじめの事実をつかみながら見て見ぬふりをするDの存在もあり、人権を考える気持ちの未発達さを感じられた。また、いじめる側の児童もいじめられる側に回る事もあり、集団内の複雑な人間関係がみられた。

このような学級全員を巻き込んだ「いじめるーいじめられる」の関係の集団により、児童相互に心が萎縮し、人間関係に歪みが見られた。「いけない」という心と行動が伴わない矛盾する自分自身に対し、また信頼し合える友達を求め、欲求不満がくすぶっているようだ。

② 指導の方針

- ・友人関係の望ましいあり方を全教育活動を通して、あらゆる機会をとらえて行う。
- ・一人一人の存在感を認め、個性を生かす学級をつくる。
- ・いじめや差別を憎み、正義と思いやりのある学級をつくる。
- ・困難を克服する体験を多くさせ、ストレスに対する耐性を育て、自分自身の成長を実感させる。
- ・家庭との連携を図る。

③ 学級集団に対する指導の実際

いじめが発覚した時点で、いじめの実態把握と、学級集団への指導を行ったが、ここでは、道徳の時間に行ったロール・プレイングの実践例を取り上げ、学級集団の変容を考察したいと思う。

ア ねらい

- ・いじめられた側がどんなに苦しみ、傷ついているかに気づかせる。
- ・いじめの行為を行った自分の問題や責任に気づかせる。

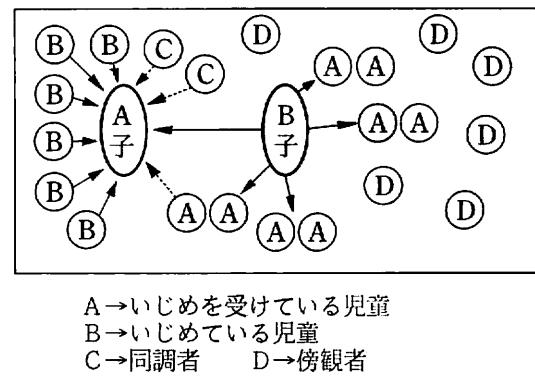
イ 方 法

- ・遠足の時一人で弁当を食べているいじめられている子、それを「暗い」とからかういじめている子、同調者、傍観者の役に分かれ、実際にそれぞれの役割を演じる。その後に全体会でそれぞれの感想を言わせる。尚、この場面は実際A子に対して起こった事である。

ウ 全体会での話し合い（抜粋）

B 「人の悪口を言うのは、いじめになると思います。」

T 「なぜ、いじめになるの。どこも傷ついていないよ。C君（学級でのいじめの中心）はどう思う。」



A→いじめを受けている児童
B→いじめている児童
C→同調者
D→傍観者

図3 学級のいじめの集団構造図

C 「口で言っているだけだし、がまんできるから、いじめじゃないと思います。」
D 「でも、かわいそうです。あんなに側で笑ったりしたら、私だったら嫌です。」
C 「あー。ジョーダンだし、いわれた方も嫌とも言わないし、考えすぎだと思います。」

その後、いじめかどうかで様々な意見が出され、それぞれが持っている価値基準が表出された。
意図的にA子を指名する。

A 「一人で弁当を食べ、からかわれてみじめだと思います。」
C 「みじめだったら泣けばいいじゃないか。泣いてないぞ。たったこれくらいで。」
A 「いじめられた人の気持ちは、その人じゃないとわからないのよ。だれも助けてくれないし、
平気そうな顔をしないとやってけないのよ。私がいうんだから……。絶対いじめです」
教室中静まり返ってしまった。

④ 考 察

思わぬA子の心の叫びに、全員が心をゆさぶられた思いがする。いじめに対し持っている内面的、
価値的な物の表出だけでなく、いじめられる側の心の痛みも感じ取ったようである。児童の日記には、「誰にも一人前の人間として生きる、生活する権利があるのではないですか。差別の波、
白い目、向こうも白い目。私達にとって理解しがたいくやしさ、ごめんね。」「私はA子さんの心
について何も知らない無知な人間でした。『誰か救って』と叫んでいるのに、私の無知さが信じられません。成長して、相手の心がわかる人間になりたいです」と、傍観者としての加害者意識も自
覚してきたように感じ取られる。

その後、自分達でいじめをなくすスローガンを作った。「いじめをなくそう、まず自分の身の回
りから、みんなでふみ出せ第一歩」これを目標にし、人との関わりにおいて、感謝や思いやりの心・
差別や偏見のない生活を送ろうと心がけるようになった。2学期からは、体の不自由な人に車いす
を贈ろうと缶のプルタブ集めを始めた。C君は、ゴミ箱から90個も集めたと得意気であった。

(2) いじめられ孤立するA子

① いじめの概要

ア 引き継がれたいじめ

進級して1週間後、「私は2年連続いじめられました」とA子が日記に書いてきた。意図的に
A子に目を向けてみると、一人で行動する事が目につく。休み時間も席から離れず一人。グル
ープ編成でも取り残されてしまう。また、A子が側に近づくと大げさに避けたり、A子が触れたも
のは指でつまんで受け取るという事もある。

イ いじめの発生

4年の時、清掃をなまけている男子に対しA子が注意した事が、「なまいきだ」といじめる標
的にされたようだ。それ以来、冷やかされたり、持ち物に落書きされたりする事も起こった。

ウ 登校を渋る

5年になって本校へ転入。10月頃より「具合が悪い」と登校を渋る日が続いた。母親が問いただすと、「転入生」「変人」「おたく」とからかわれ、学級メンバーから仲間外れされているからだとい
う。

② A子の生育歴及び特徴

A子の家族は、父・母・本人・弟（小5・小2・小1）の6人家族である。母親の話によると、
弟に手がかかることやA子は自分で出来る子という思いがあり、手をかけずに育てた。幼い頃から
内遊びが好きで、友達の輪の中に入って行く事はなかったという事である。

③ A子の学校での様子

独創性に富み、作文や絵の表現に優れている。休み時間も、一人で得意なイラストを描いて過ごす。周りに関わる事はほとんどなく、ソシオメトリックテストでも、級友の中に存在が薄い。無表情で感動性に乏しいが、教師と二人になると饒舌になり、自分の意見をはっきりと話す。日記にも、
ぎっしり自分の考えを書き、理論家で考えを押し通す芯の強い面がうかがわれる。

④ 問題の理解と診断

A子は善悪をはっきり区別し、いい加減な妥協をしない自立心の強い児童のようだ。そういう態度が「いい子ぶってる」と受け取られ、いじめの対象となったようだ。また、転入生という事や、異なる考え方や行動をする事が異端者扱いされいじめられたと考えられる。

いじめにより集団の中で孤立したA子にとって、疎外感からくる辛さ・淋しさや集団に入れない欲求不満は相当なものと思われる。そのA子からのいじめの訴え。進級してすぐにあった事から、新しい教師・友達そして自分との出会いを期待するA子の切ない願いが感じ取れる。その願いに応えられるよう、まずA子の辛い気持ちを共感的に受け止め、A子を支える必要があろう。

⑤ 指導の方針

- ・日記を通して、A子の心の痛みを共感的に受け止める。
- ・自分の個性を自覚し、それを生かした役割を与えることにより傷ついている自尊心を回復させ、自信と意欲を育てる
- ・抑え込んだ感情を表出させ、訴える力をつけさせる。
- ・共に行う活動を体験させる事により、居場所があるという所属感や存在感を持たせる。
- ・いじめからA子を守るという事をA子の保護者へ伝え、保護者との信頼関係を築いていく。

⑥ いじめの訴え

4月。「いじめのない学級を作る」という担任の言葉に助けを求めるかのように、自分の身に起ったいじめの事実を日記に書いてくる。

日記の余白にマンガの主人公を描いてくるが、どれも英雄として活躍するヒーローを描き、自分の似顔絵には口が描かれていません。現実の中に抑圧された心理的うっ積があるからこそ、抑圧から解放してくれるヒーローをマンガの世界に求めているように思える。また、「言いたいけど言えない」不満が、似顔絵の中に反映されている感じがする。

休み時間になると、頻繁に鼻をかむ。心理的な緊張を鼻かみにより解消しようとしているのだろうか。

5月。「なぜコミック全巻持っているだけでおたくなんだ。私はぜぇーったいおたくはやだっ、やだ……いやだーっ。許さない」と日記に書かれていた。そこで、A子の支えとなりそうな児童に働きかけ、遊びの中へ誘ってもらったが、「花いちもんめをして遊んだが、私は動かなかった」と、あまり遊びへの意欲は見られなかった。

「自分をいじめる側に対する怒り」「自分の心の傷をわかってほしい」というA子の気持ちは、いじめを解決しただけでは解消されそうにもない。「友達と遊べない」という社会性の未発達も問題である。そこで、A子が興味や関心を示す「イラスト描きが好き」という事を生かす活動を設定してみた。

⑦ 心を解き始めたA子

A子のイラストの腕前をみんなに紹介する事により、掲示係が動き出した。掲示物として使うみんなの似顔絵描きを依頼してきたのだ。その事がきっかけとなり、イラストだけでなくA子のアイディアまで提供され始めた。学習の場でも、A子の意見を大切にするようになった。

「A子の異質」を「A子の個性」と取らえ始め、学級集団がそれを認め尊重する事により、A子の心も開かれ、自分や友達のよさとの出会いに感動し、何でも言い合える交友関係が結ばれ始めた。

日記にも、「ほめられる事を喜んでいるところである。イラストを描いた時だって『持って帰りたいよ』と言われると、嬉しいものである。あきずにここまで描けたのは、そういう仲間のおかげ」と、書いてきた。

⑧ 自信を取り戻したA子

4月 似顔絵



資料1 A子のイラスト

5月 花いちもんめ



資料2 A子のイラスト

学級集団から認められたA子は、自信を持って意欲的に行動したり、自分の存在価値を認めるようになってきた。「現代人は良心を忘れていいけない。人の役に立てる事をし、罪を犯しても、つぐなえばいいんじゃないか」と日記に書き、いじめを克服した体験から寛容の心や、感謝の心も持てるようになり、たくましく成長したA子が感じられた。その姿勢は、様々な場面で見られ、芸芸会最後の準備係に「せっかくのチャンスだから」と自ら立候補したり、学級文集係にも、「みんなのイラストを残したい」と希望してなった。

日記には「長所とは他人が気づくもので、短所とは自分で気づき直していくもの」と書かれていた。

⑨ 考 察

いじめが長期化している場合、真っ先にいじめられている子の心身を守る手立てを講じる必要がある。A子の辛い気持ちを十分受け止め支えながら、いじめ解決へ強い姿勢で取り組む事により、学級集団もA子も変容していった。人間関係のつまずきを一度に取り除く事は困難であるが、「どの子も良くなろうとする力と意欲を持つ存在」として大切にすれば、教師と児童・児童相互の人間関係も好ましいものに変わっていくものと思う。好ましい人間関係に支えられる事によってA子にも、安心感が生まれ、自分に自信を持ち、個性をみんなの為に生かしてくれるようになった。

また、孤立した児童が積極的に周囲と関わっていけるようになるためにも、共に活動する体験の重要性を再認識した。共に体験する中で、友達のよさや新しい自分を見つける事ができるのである。

(3) いじめに走るB子

① いじめの概要

「一緒にグループになりたくない人はだれですか」の問いに、A子も含めた6人の女子から、B子の名前が上げられた。自分を受け入れる友達には、お金や品物を配ったりしてグループをつくり、主導権を握るらしい。反対に、自分の気に入らない相手の事は、無視したり、仲間外れにして、グループから、排除するためだという。これまでも、友達とのトラブルが絶えず、強い影響力を持つ子として一目置かれている。

② B子の生育歴及び特徴

家庭は、母親・本人・弟（小4・小2・小1）の5人家族である。幼児期に両親が離婚、母子家庭で育つ。母親は離婚によりB子に負担をかけて申し訳ないと、常にB子に謝っているようだ。

そういう母親の気持ちを察してか、夕食の準備をして母親を助けている。母親の相談相手になる頼もしもあり、B子に対する母親の期待は大きい。弟のめんどうもよくみるが、すぐ感情的になり兄弟げんかも絶えないようだ。

③ 学校での様子

真面目で、宿題や課題に丁寧に取り組む。係活動・委員会活動等の仕事は、責任を持ってやり通す。

困っている人がいると手をさしのべてあげるやさしさもある。自分に従順な人を集めてグループをつくる傾向があるが、そのグループは長続きしない。

④ 問題の理解と診断

家庭的に満たされない気持ちがあるようだが、自分の置かれている立場について不満をぶつけるという態度は見られない。常に長子という自覚を持って行動している物わかりのいい冷静な子である。

交友関係では、「自分を受容してくれるか」を過剰に意識し、友達をひきつけておきたいという思いが強い。受容されている証が脅かされると疎外感を持ち、友達に対するねたみや注意をひきたい等の要因からいじめを起こすと考えられる。自己存在感を求めているかのように考えられるので、温かく包み込む対応が必要なのではと思われる。

3月 学級の仲間



資料3 A子のイラスト

⑤ 指導の方針

- ・面接を通し、教師との人間的な信頼関係をつくり上げる。
- ・自分を理解し、自分を大事にする自律心を育てる。
- ・係活動やグループ活動を通して、思いやりの心や寛容、協力等の社会性を育てる。
- ・よくない行動に対しては、毅然たる態度で指導に当たると同時に、B子の存在や努力を認め、B子に心の安定をもたらす。
- ・B子を否定するのではなく「今回の体験を今後生かすには」という姿勢で家庭と連携を図る。

⑥ 次々と起こる友達へのいじめ

4月。学級替えで新しく一緒になった二人と急接近。どこへ行くのも一緒。

ところが、突然二人をにらみ、無視するようになった。そのうち「誰にも言わないでよ。○子があなたの事を……」とうそを言いふらし始めた。放課後B子と面接を行うが、「最初に○子が私を置いていったから」と相手を非難し、自分を正当化しようとするばかりであった。

5月。栽培委員を希望し、一人残っても水やりを確実に行う。学級の子の「働き者チャンピオンにしよう」の声を受け、チャンピオンに認定する。

それ以後交友関係も広がり安定しているものと思われたが、再び別の二人組の中に入り込みいじめを起こす。その後仲を修復するわけでもなく、次々といじめを起こす。

6月。学級でのいじめ問題の話し合いの後、「いじめられている人がかわいそう」と泣き出す。「先生もB子と同じ気持ちよ」と伝えると、「自分も友達をいじめていたかもしれない。いけないと思うけどやってしまう。がまんできない」と話し始めた。B子自身、いじめという行為の善悪については十分認識しており、相手の痛みもわかっているようである。自分の心がつかめず、自分の不明確な行動に苦しんでいるのはB子本人かもしれない。

9月。「遊びに自分をさそわなかった」という事から、相手へ無言電話をかける。表情も暗くなり、まわりに話しかけることも少なくなった。

⑦ 心を開き始めるB子

放課後、面接を行う。B子は何をうたえるのだろうか。どう接したらいいのだろうか。様々な思いが頭をよぎる。

T「B子、先生はB子の何でも一生懸命がんばるところは好きだよ。せっかく、いいところがあるのに、友達も、自分も傷つけて残念。なぜなんだろって先生も考えているんだけど……。先生の好きなB子を大切にしてほしい。」

私の目をじーっと見つめるB子。しばらく沈黙が続き、二人とも涙が出てくる。

T「本当は謝りたいのに『ごめんね』『仲間にいれて』が言えないだけだよね。」

大きくうなづくB子。

T「B子は、『がんばろう』『しっかりしなくては』という気持ちが強いんだろうね。少し肩の力を抜いてもいいのよ。いつも先生の事を手伝ってくれるから、今度は、先生がB子の事を手伝ってあげたいの」

B「先生、ごめんなさい。言えない…………。お母さんに言えない。」

そう言って泣きくずれてしまった。その後「誰にも、弱味を見せたくない。」「家の仕事は私ばかりで、弟達は何もしない。もう家に帰りたくない。弟達が憎い。お母さんには言えないと話し始めた。」

T「そう、つらかったね。先生は、本当のB子さんを見てみたいよ。B子さんが素直になる事がお母さんや友達を喜ばす事になると思うよ」

B「でも、もう直らないかも知れない。遅いかも…………。」

T「遅くない。これからどう変わるかでしょう。失敗したら、挽回すればいいだけじゃない」

これが、B子が自分の気持ちを開いた最初である。B子の心をかいまた見たような気がした。

早速、母親に連絡し、B子が自分の気持ちを話してくれたのを喜ぶとともに、お互いにB子がリ

ラックスできる場をつくることを確認し合った。また、心が安定してきた変化を認めてほめるようにした。B子への要求度が減少していくに従って、過度の緊張もほぐされていき、変わろうとする様子が見られるようになった。友達とトラブルが起りそうになると、「挽回しよう」と自分自身に言い聞かせ、友達の中へ入っていくようになった。学級集団もB子の変容を喜び、「やさしさを取り戻したB子、復活パーティ」を開いてくれ、「早く気づいてよかったね」と喜んでくれた。

⑧ 考 察

教師が、「児童を分かりたい」と本音で話す事によって、B子は心を開き、語り合えるようになってきた。

まわりが、「B子は、真面目でしっかりした子」と固定概念でとらえ、それを要求した事がB子にストレスを与えることになってしまった。B子は、自己認知するよりも、まわりからの期待に過敏になり、それに応えようと自己受容することが阻害され、心が歪められたと思われる。「自分らしく生きられない」という無理に抑えられた感情が苛立ち・不満となり、友達へ向けられたのだろう。

B子のよさを受容するのでなく、長所も短所も含めたありのままのB子を受容することにより、B子は安心し、自分自身を見つめるゆとりが出たと思われる。「失敗・挫折してもいいんだ」「本当は自分を出していいんだ」という安心感が、心の安定へつながったと考えられる。

そういうB子の変容を見守り、温かく支える許容的雰囲気の学級集団を得たことにより、B子は自分の価値を感じ、自信・有能感を取り戻し始めた。

6 まとめと今後の課題

沖縄のことわざに「十ぬ指や同丈や無えーらん」（十本の指の高さが同じでないように、人それぞれの個性がある）というのがあり、それを肝に命じながら児童と向き合った。身体の違い、性格的な違い、それぞれの違いがその児童の個性であり、個性があるから自己存在価値が見いだされる。それゆえ、かけがえのない個性として児童の人間性を尊重する事ができる。

そういう児童の個性、存在そのものを否定するのがいじめである。いじめの問題は、当事者だけの問題、あるいはいじめの行為を止めるだけでは不十分な事が多い。学級集団の質の問題、未熟な人間関係の問題としてとらえる事が大切である。

いじめ問題を考えた時、担任としては、好ましい人間関係が育つ学級にするよう努力する事が大切である。今教師がなすべき事は、一人一人の児童を尊重し、個性を認め、相互理解・相互信頼し合える人間関係を育て、集団で学び合える学級をつくることである。集団内の人間関係を高めることにより、集団の持つ教育力も高められよう。そういう好ましい雰囲気の学級集団の中で、児童は自分の個性や可能性を発揮し、人との交わり方を習得していくものと考えられる。そして、学級集団の中で自他の認識を深め、正義と思いやりの心が育ち、人権尊重の精神も身につけていく。

いじめ問題に関わった事により、児童の可能性のすばらしさと、児童が成長していく喜びと一緒に味わい、児童が学ぶ姿に感動を覚えた。反面、児童を多様的・柔軟的にとらえる必要性と集団の相互作用に対する認識を問い合わせられた。また児童の特徴をつかみ、児童の言動の裏にあるサインの早期発見の仕方、児童のストレスの昇華のさせ方、他学級・保護者への連携の図り方等、これから課題である。

<主な参考文献>

| | | | |
|------------|----------------------|--------|-------|
| 宮川八岐 | 『明るい学級をつくる』 | 小学館 | 1995年 |
| いじめ問題研究会編 | 『いじめ対策マニュアルQ & A』 | 大成出版社 | 1995年 |
| 佐々木雄二 | 『生徒指導・教育相談』 | 福村出版社 | 1993年 |
| 全国教育研究所連盟編 | 『学級担任による教育相談の展開』 | 東洋館出版社 | 1989年 |
| 宮本一史 | 『カウンセリング・マインドを生かす教師』 | ぎょうせい | 1989年 |